

危ない食卓

緑の党 2018 キャンペーン
ラウンドアップ NO! チーム

米国や豪州産の牛肉、乳製品、豚肉は危ない

米国産乳製品



rBGHホルモン

米国産牛肉



牛成長ホルモン

豚肉



赤身増量剤使用

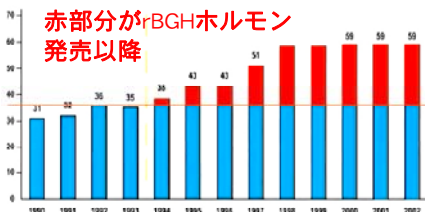
米国産の乳製品

米国産の乳牛には、モンサント社が開発した遺伝子組み換えホルモンrBGHが使用されています。月2回、牛に注射すると牛乳が約20%増加します。

しかし、この牛乳はIGF-1(インシュリン様成長因子)を含み、これは男性は前立腺癌、女性は乳癌のリスクを高めます。

世界ではアメリカだけが許可しており、日本も使用許可はしていませんが、乳製品として多量に輸入され、日本人の口に入っています。

【アメリカ人女性の乳管癌患者数】



(出典：遺伝子組み換えルーレット)

米国産や豪州産の牛肉

アメリカやオーストラリアでは牛成長ホルモン剤を牛に投与しています。牛の耳たぶに薬剤を打ち込み、生育期間通じて融解させることで、通常2年程の飼育期間を半年ほど短縮します。

そのため牛肉に牛成長ホルモンが残留します。牛の赤身で国産牛肉の600倍のエストロゲン（ホルモン依存性ガンの因子）が残留しているといえます。

EU では、米国産牛肉の輸入を禁止してから7年間で乳癌が大きく減りました。(アイスランド▲44.5%, イングランド▲34.9%, スペイン26.8%など)

豚肉赤身増量剤（塩酸ラクトパミン）

豚肉に赤身が増える飼料添加物で、輸入肉に含まれます。世界160カ国(EU, ロシア, 中国, 台湾など)で禁止。米国, カナダ, メキシコ, オーストラリアで使用。

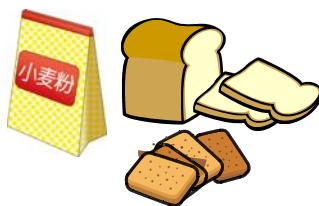
小麦は危険、大豆も危険（2017～）

小麦

グリホサート

30ppm

危険



大豆

グリホサート

20ppm



2017年にグリホサート（除草剤ラウンドアップの成分）の残留農薬基準が改定され、小麦は5ppm が30ppm に変更されました。米など多くの穀物の残留濃度は0.1ppm ですし、動物実験では2ppm で異常が生じており、30ppm はとても高い値です。

大豆やトウモロコシは除草剤をかけても枯れないよう遺伝子が組換えられています。アメリカの農業では除草剤が大量に使われ、グリホサートが農作

物に含まれます。今まで非遺伝子組み換えだった小麦も遺伝子組み換えに変更されようとしています。

WHO の組織である国際癌研究機関はグリホサートには発癌性がある（5種類のうち上から2番目）としています。

モンサントはベトナムの枯れ葉剤を作ったメーカーであり、枯れ葉剤の応用が除草剤です。近年は除草剤耐性雑草が増え、ジカンバなど枯れ葉剤と同成分の強力な除草剤が増えています。

ポストハーベストまぶしトウモロコシ

農薬ガスが充満する船倉



（世界が食べられなくなる日より）

トウモロコシ



コーンスターチ



アメリカでは収穫したトウモロコシに、腐敗や防黴のために農薬が混入されます。それでもカビが発生します。アメリカ産トウモロコシでたびたび検出される**カビ毒アフラトキシン**は極微量の15 μ g/kgで**全ラットに肝臓癌**が生じる強力なものです。食品では10 ppb 以下の規制がありますが、これを超えたものは20ppbまで飼料になります。

日本はこれまで輸入果物の防かび剤（ポストハーベスト農薬）を食品添加物として認可してきました。それだと表示義務があり、コストもかかるので、TPP の日米協議で表示の不要な農薬扱いにすることを受け入れました。

ポストハーベストが懸念される作物

小麦、大豆、ナッツ、レモン、オレンジ、グレープフルーツ、チェリー、ブドウ

表示はないけど遺伝子組み換え



菜種自給率
0.04%



原料のタンパクが
検出不能のときは
表示義務なし

グリホサート残留値2017改訂

改訂前

ひまわり種子	(0.1)	} 40ppm
ごま種子	(0.2)	
紅花種子	(0.1)	
綿実	(10)	
なたね	(10)	→ 30ppm

国産菜種の自給率は0.04%(2009年)です。従って、キャノーラ(西洋菜種)を原料とする食用油は外国産の遺伝子組み換え菜種が用いられている可能性が高いのです。

またキャノーラは石油系溶剤により抽出されている点でも問題があります。

油料作物の残留基準が2017年に大幅改悪され、菜種以外の油もグリホサートの残留基準値が高くなりました。

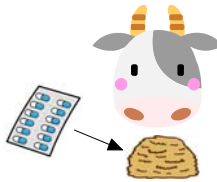
日本の表示制度にも問題があります。

日本では製品の検査によっており、食用油や醤油のように原料の遺伝子組み換えタンパクが検出困難な食品は表示不要です。EU では原料を検査し、混入がある場合は表示義務があります。

また意図せざる混入については、日本は5%まで、台湾・韓国は3%で、この点でも劣っています。

油は用いる分量が少ないので軽視しがちですが、アトピーの原因とする医学者もいます。注意したいものです。

牛や豚は 抗生物質を混ぜた 飼料を食べている。



◆抗生物質

◆遺伝子組み換え飼料

◆高濃度の残留農薬

今、牛や豚の飼料に添加物として抗生物質を混ぜるということが普通になっています。アメリカや日本の抗生物質のおよそ7割は家畜用途です。ウィルスへの感染を予防し、肥育を促進するとされています。

しかし、抗生物質の濫用により抗生物質耐性菌が増え、これが肉を介して人間に入り、中耳炎が治らないなどの問題が起こっています。

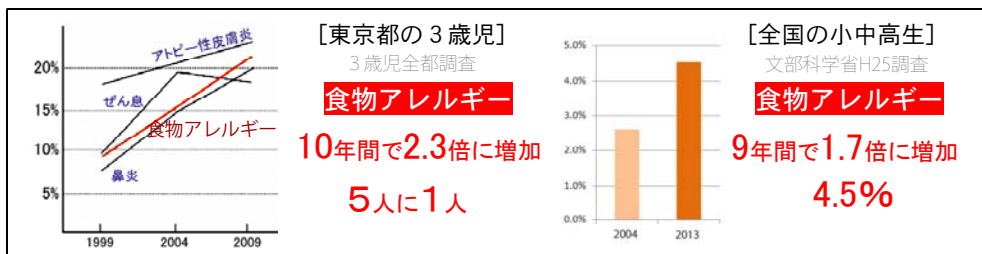
飼料にも問題があります。牛や豚が食べる干し草・テフ(稲科植物)などは2013年に米国のグリホサート残留値が100ppmまで引き上げられ、残留農薬が多い物になっています。

遺伝子組み換え飼料を使うようになってから日本の牛の受胎率が66%(1989)から51%(2014)と落ちました。

同時に人間の不妊も増え、6組に1組が不妊という状況になっています。

遺伝子組み換え・ラウンドアップ型農業にNO!

1999年に大豆のグリホサートの残留基準値を6ppm→20ppmに緩和
それ以降、子どものアレルギーが激増しました。



日本で子供のアレルギーが、1999年以降激増しました。東京都の3歳児調査では、食物アレルギーの子が20%、何らかのアレルギーを持つ子どもは55%、2人に1人がアレルギーなのです。

その原因として最も疑わしいのは大豆に残留する農薬グリホサート（除草剤ラウンドアップの主成分）です。

グリホサートは特に遺伝子組み換え作物(GMO)に残留しています。アメリカ環境医学会は、子供のアレルギー、喘息、腸の疾患に対し、遺伝子組み換え食品を断つ指導をしています。またGMOは不妊症、免疫不全、肝臓、腎臓、胃腸器官に対する毒性が認められるとして即時出荷停止を求めています。

2017年小麦のグリホサートの残留基準値が30ppmに緩和

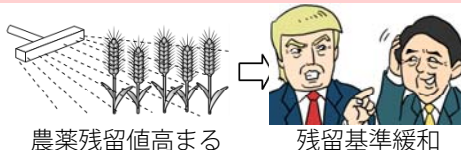
2017年、小麦のグリホサート残留基準値が5ppm→30ppmに緩和されました。

小麦は多数の食品に使われており、大豆の20ppmに比べてはるかに大きな影

響が予想されます。

グリホサートは生殖に対する影響もあり、女性の不妊・男性の精子減少などの原因物質とも考えられています。

ラウンドアップを乾燥目的で使う荒技農業がアメリカで広がる



グリホサートは遺伝子組み換え作物ばかりでなく、近年は乾燥目的の使用が広がっています。小麦や大豆は収穫後に乾燥させることが必要です。これを除草剤のラウンドアップをかけて枯らすことで代用しようというのです。撒布が収穫直前に行われるために残留農薬値が高くなります。

こうしたアメリカの遺伝子組み換えや除草剤ラウンドアップを多用する農業の影響がわれわれの食卓にも及んでいるのです。（監修：安田節子）

緑の党2018キャンペーン
ラウンドアップNO! チーム

緑の党 <http://greens.gr.jp/>
チームのメール: midori2018@greens21.net

このパンフを友人知人に配布していただけるメンバーを求めています。